

# 平成28年度アドバイザー派遣事業実施レポート

**研究主題 『「わかった」「できた」「もっとやりたい」が実感できる算数学習  
～子どもたちが創る学び合いの学習をめざして～  
～一人一人が安心して学び、満足感を持つために～』**  
鳥取市立大正小学校

アドバイザー：横浜国立大学 石田淳一教授

## 1 研究主題について

本校は、明治6年6月に開校し、今年で創立143年目を迎える歴史のある学校で、鳥取市を流れる千代川の下流、西岸に位置している。校区は、豊かな田園地帯と工業団地、大型ショッピングモールや新興住宅地など多彩な環境が広がる地域で、今年度は学級数9、児童数148名である。

本校の児童は、明るくて人懐っこく、休憩時間には多くの児童が運動に親しみながら過ごすなど、大変活動的である。また、指導されたことを素直に受け止めたり、決められたことは一生懸命がんばろうとしたりすることができる。しかし、相手の気持ちを考えずにとった言動がもとで友達同士のトラブルがよく起こったり、各種アンケート結果から「自分の良さが言えない」と回答する児童が多かったりするなど自己肯定感が高いとは言えない。また、学習面においては、「わかりたい」と願っている児童が多い一方で、学習に対して苦手意識があり、消極的な態度で授業に臨む児童もいて、特に算数科での学力の二極化傾向はここ数年の最大の課題である。

そこで、これらの課題を克服し、児童一人一人が自信と基礎的・基本的な学力を確実に身につけるためには、算数科の学習を中心に、「わかった」「できた」「もっとやりたい」という体験を積み重ねることが必要だと考えた。達成感が新しい意欲と自信を生み、意欲と自信が学力の向上につながるということである。そして、どの児童も「わかった」と感じられるためには、みんなで考えを少しずつ出し合いながら課題解決の見通しを持ったり、わからない場合はわかっている児童が説明したりするなど、児童同士が学び合い理解を深めていくことが大切であると考えた。わたしたちは、『「わかった」「できた」「もっとやりたい」が実感できる算数学習』と研究主題を設定し、その研究主題にせまるものとして、「子どもたちが創る学び合いの学習をめざして」「一人一人が安心して学び、満足感を持つために」と副題を設定し、どの児童にとってもやさしくてあたたかい授業づくりに取り組んでいるところである。

## 2 研究のねらい

○みんなで見通しを持って、いっしょに取り組み、いっしょに考え、みんながわかり、できるようになる「すべての子どもにやさしくあたたかい」授業を展開することで、どの子どもにも基礎的・基本的な学習内容の定着をめざす。

## 3 研究の目標

- 教材研究に基づいた算数的活動を工夫して、子どもたちに基礎的・基本的な知識、技能を習得させ学びの意欲を高める。
- 子どもたち自身で課題解決していく学習展開を工夫して、子どもたちの聴く力や話す力を鍛え、思考力・表現力・判断力を育てる。
- 協同的に学習を進めて学びの成果を共有することを通して、学びの達成感を持たせる。

#### 4 研究の仮説

- 達成感を積み重ねることで、学習意欲を高めることができるだろう。
- 協同的に学習を進め、どの児童も主体的に学習に参加することで、基礎的・基本的な内容の理解を深めることができるだろう。
- お互いの考えを聴き合う活動を取り入れることで、自信や安心感を持って学習に参加することができるだろう。

#### 5 研究の実際(アドバイザー派遣事業)

第1回	6月8日	第1学年 第2学年 第3学年 第4学年 第5学年 第6学年	たし算(1) たし算とひき算のひっ算(1) かかれた数はいくつ 何倍でしょう 少数÷少数 分数×分数
第2回	7月13日	第2学年 第6学年	1000までの数 円の面積
	10月26日	全学年	鳥取市小学校教育研究大会

昨年度までの石田先生の指導を受け、年度当初から次の点を意識して算数科の授業改善に取り組んだ。

- 授業展開の工夫
- 学び合いの学習を目指した取り組み
  - ・学び合いのイメージ共有化
  - ・聴き方指導
  - ・つなぎ方指導
  - ・問題提示の工夫
  - ・グループ学習
  - ・グループ発表
  - ・相談タイム

本年度、第1回の授業研究会により次のように石田先生から指導助言をいただいた。

- ・導入は、5分以内にする。
- ・45分で授業を完結させる。
- ・グループ学習後の全体発表時に、子どもにきちんと視点（「自分たちの考えと同じところや違うところはどこか」など）を持たせてホワイトボード（他グループの考え）を眺めさせる。
- ・全グループに発表させる必要はなく教師が意図したグループに発表させる。
- ・視覚的にもホワイトボードをすっきりさせる。（説明をすべて書かなくてもよい）
- ・線分図や関係図の指導は丁寧に。（教師がかいてみせる→教師と一緒にかかせる）
- ・「足場」がなければ、グループにしても学習が成立しない。
- ・グループやペアをどのタイミングで入れるかを再考する。

石田先生の指導を受け次のように共通理解して授業改善に取り組んだ。

##### <導入の時間は5分以内で！！>

題意を把握させるため説明を入れすぎている。本校児童の実態からすると、耳から入ってくる情報が多すぎるとしんどいと感じる子どももいる。挿絵の出し方を工夫したり、「読み聞かせ方式」で問題文を作ったりする方法にも挑戦してみる。また、問題文はすべて書く必要はなくポイントとな

ることだけをノートに書かせるなどして時間を短縮する。また、時間が始まる前に既習内容をふりかえる取り組みをする。導入を短縮できたら、その分練習問題もじっくり取り組ませることもできる。

<授業スタイルを確立する（基本は授業モデルA）>

「算数授業を改善しよう～学力アップ～をめざす学び合いの授業をめざして～」という資料から

- Aモデル…新規内容や教えて習熟させることをねらう授業向き。
- Bモデル…最初から問題の解決を子どもに委ねる。思考力をつけることをねらう授業向き。
- Cモデル…1時間の中でねらいが異なる場合やたくさん問題を1時間で扱う授業向き。

本校児童の実態から、基礎基本の学習内容の定着に課題のある本校にとっては、Aモデルの授業展開が望ましいと考える。

1、問題1は全体で解決する。

2、問題2はグループで解決する。

※ 問題2でのグループ学習は、多様な考えは出にくいですが、問題1の全体解決の場でも理解できない児童がいることが考えられるので、そのような児童を「とりこぼししない」ために、グループのみんなで問題1の考えや方法を確認し合いながら進められるという点で有効です。

3、まとめる

4、練習問題に取り組む

5、ふり返る

というAモデルを意識して取り組む。

また、これまでの研究を受けて次のチェックリストを意識して授業改善に取り組んだ。

		チェック（現在）	チェック（夏休み前）
1	導入は長くなりすぎず、5分以内で行っている。		
2	子どもたちは一番遠くの友だちに聞こえる声で話している。		
3	子どもたちは問いかけ型の発表をしている。		
4	子どもたちは話している人の顔を見て反応を返しながら聞いている。		
5	相談タイム等で全員が挙手する場面を設けている。		
6	子どもたちが発言をつなぐ場面がある。		

7	子どもが前に出て指示棒を使って発表する場面がある。		
8	「気づき」の場面で、既習事項を使って見通しをもたせている。		
9	グループ学習やペア学習を取り入れている。		
10	10分間の練習問題の時間が確保できている。		
11	めあてに対する振り返りを書かせている。		



本年度、第2回の授業研究会では、次のように石田先生から指導助言をいただいた。

- ・机の配置、U字、V字、コの字など、児童の机の配置を学び合いに適した教室環境にする。
- ・説明の仕方を板書に表す。それが手本となり、子どもが次の問題の解決法を説明するときの助けとなる。
- ・ワークシートの自由記述は難しいから、□をつかうなど穴埋め式のものも考える。
- ・個人で問題を取り組ませる前に、とにかくしっかりと見通しを持たせる。
- ・わかる子だけが話している。(援助提供) わからない子も「ここがわからない」「教えて」などの働きかけをしないといけない。(援助要請) この連鎖が大切。
- ・仲間に伝えるためにも、つなげてもらうためにも、子どもの声をもっと大きくする。
- ・先生の声が大きすぎる。子どもの声が響きあうようなクラスを目指したい。
- ・つなぐ場面を1時間のどこに設定するか、事前に考えておく。(基本的には、見通しを持つ場面やまとめの場面)
- ・考える手がかりの工夫が大切。ワークシートが取り組みやすいものになっているか確認する。
- ・わからないことは「わからない」とペア学習やグループ学習で言えるようなクラスに。



## ①成果

- ・算数シナリオを用いた学び方指導などを行ったことにより、子どもにとっても教師にとってもめざす方向が明確になり、共通実践できた。
- ・よいモデルを示したことで、聴き方・話し方・学び合いの仕方の形ができた。
- ・グループ学習やリレー説明を取り入れたことで発言する子が増え、授業が活性化した。それとともに「わかった」「できた」という声が多く聞かれるようになった。
- ・仲間を意識した問いかけ型発表や、あたたかい反応を返しながらかくことができるようになり、みんなできようとする雰囲気が生まれた。
- ・学習を形から学ぶことや個に応じた支援をくり返し行うことで、「わかってうれしい」「学ぶことが楽しい」と感じるなど、学習への意欲が高まった。
- ・子どもたちの努力や成果を教師が承認することで、子どもとの信頼関係が深まった。
- ・安心して学べることが、支援学級や交流学級での人間関係の広がりにつながった。

## ②課題

- ・学び合いの質を高めるための教材研究、子どもの力を伸ばす教材研究に努める。
- ・ワークシートや補助カードなど、どの子どもにも見通しを持たせるための教材・教具の工夫をさらに進める必要がある。
- ・学び合いを深める教師の関わり方、ねらいにそった取り上げ方、子ども同士のつなげ方についての研修を深める。
- ・グループ学習の質を向上させ、教師主導の授業から、子ども全員の主体的な学びへと高める。
- ・時間配分に留意し、練習問題の時間を確実に確保する。
- ・学習内容をとらえることはできているが、身につけ活用する力は不十分であるため、より多様な課題を準備し取り組ませるなどの工夫が必要である。

## 7 おわりに

本年度、アドバイザー派遣事業で横浜国立大学の石田淳一先生に指導していただき研究をさらに進めることができた。学び合う算数の授業について、実際の授業の中で指導していただいたり、教材の見方を具体的に教えていただいたりして授業改善に取り組むことができた。ペアやグループ学習にスムーズに取り組めるようになり、主体的に関わろうとする子どもたちの姿も見られるようになってきている。この取り組みを継続し、「わかった」「できた」「もっとやりたい」と実感できる算数学習をめざして授業力を磨き、どの子にも学びの達成感をもたせて主体的に算数学習に取り組む子どもに育て学力を向上へとつなげたい。